

福島県西白河郡
矢吹町文化財調査報告第7集

大和久遺跡 大和久館跡 発掘調査報告書

昭和58年11月
矢吹町教育委員会

福島県西白河郡
矢吹町文化財調査報告第7集

大和久遺跡 大和久館跡

発掘調査報告書

昭和58年11月
矢吹町教育委員会

序 文

矢吹町と大信村との境界東、東北自動車道西側の山林約15haを地元(株)県南開発より工業用団地造成の計画があり調査しました。

調査に当っては日本考古学協会会員永山倉造氏に依頼し実施しました。

今回の造成予定地は、隈戸川流域で早くから文化の開けた所であり、大和久館跡や堰の上遺跡など矢吹町の歴史を知るうえで重要な地域であります。こうした事から、町としても今回の開発については(株)県南開発と充分に話し合い文化財の保護、保全の意味からも大和久館跡を緑地帯として残すことについて心よく了承していただきました。

今後も町として文化財の保護、保全に全力をあげると共に町民の方に文化財について一層のご理解とご協力をお願いするものであります。

最後に、調査にご協力くださいました関係者の皆さんに感謝すると共に、この報告書が今後の調査、研究にご活用いただければ幸いに存じます。

昭和58年11月1日

矢吹町教育委員会教育長

円谷 行雄

調査要項

遺跡名	大和久遺跡、大和久館跡
所 在 地	福島県西白河郡矢吹町堰の上
調査主体	矢吹町教育委員会
調査期間	昭和57年5月21日～7月23日
調査組織	担当者　日本考古学协会会员　永山倉造 調査員　真船高年、永山祐三
協力者	草野リエ、浅倉義勝、水戸文子、加藤利雄、円谷富子、八重崎ヨシ子、関根保夫、小針久子、渡辺恵美、東北学院大（中沢真奈美、小林和子、井口恵美、神成洗志、松木仁）、金沢美術大学（菅野良一） 鶴見女子大学（丸山貴子）
事務局	矢吹町教育長　円谷行雄、教育次長　大沼重一 主幹　小板橋孝助、社会教育主事　長岐敬一 主査　須藤栄美

例　　言

- 1 本書は、矢吹町大字大和久に所在する大和久遺跡発掘調査の報告書である。
- 2 本調査は（県南開発KK）による工業団地造成に先だつ事前調査で、調査費は原因者負担による。
- 3 本書に掲載した図面は真船高年、関根保夫、小針久子、渡辺恵美、大野昌子が実測・トレースを行ない、写真撮影は永山祐三が行なった。
- 4 本書に収録した遺物実測図は、土器を $\frac{1}{8}$ ・石器を $\frac{1}{2}$ 縮尺として統一し、それぞれにスケールを付している。
- 5 本書の執筆及び編集は永山倉造が担当した。発行の責任は矢吹町教育委員会にある。
- 6 遺跡位置図は、国土地理院（五万分一）地形図を使用した。

目 次

序 文

調査要項

例 言

挿図目次 図版目次

第 1 編	大和久遺跡	1	
第 1 章	位置と環境	1	
第 1 節	遺跡の位置と地理的環境	1	
第 2 節	歴史的環境と付近の遺跡	1	
第 3 節	文献に残る矢吹の古代と中世	2	
第 2 章	調査の経緯	4	
第 1 節	調査に至るまで	4	
第 2 節	試掘調査	4	
第 3 節	本調査（昭和57年）	5	
第 3 章	発見された遺構と遺物	6	
第 1 節	遺構・古代	6	
S B 01	9	S A 02	9
S B 02	9	S K 01	9
S B 03	9	S K 02	10
S A 01	9		
第 2 節	大和久遺跡の遺物について	12	
土師器	12	須恵器	18
石器	21	特殊遺物	25
第 2 編	大和久館跡	41	
第 1 章	大和久館遺構	41	
第 1 節	大和久館の概要	41	
第 2 節	大和久館の立地	41	
第 3 節	南通路（大手口）と西通路（搦手口）	41	
第 4 節	山城跡	42	
	まとめ	48	

挿 図 目 次

第1編

- | | |
|--------------------|--------------|
| 第1図 国土地理院（五万分一）図 | 第7図 土師器実測図 |
| 第2図 大和久館跡グリット図 | 第8図 須恵器実測図 |
| 第3図 SB01（1号建物跡）実測図 | 第9図 須恵器実測図 |
| 第4図 土坑実測図 | 第10図 須恵器実測図 |
| 第5図 遺構配置図 | 第11図 石器実測図 |
| 第6図 土師器実測図 | 第12図 特殊遺物実測図 |

第2編

- | | |
|----------------|-----------|
| 第1図 大和久館跡全図 | 第3図 石臼実測図 |
| 第2図 大和久館跡山城配置図 | |

図 版 目 次

第1編

- | | |
|------------------------|------------------------|
| 図版1 ①大和久遺跡全景(南から) | 図版5 ①SB02、SB03建物跡(東から) |
| ②SB01建物跡(東から) | 図版6 ①SB02、SB03建物跡(東から) |
| 図版2 ①SB01建物跡、柱穴断面 | ②SB03建物跡、柱穴断面 |
| ②SB01建物跡、柱穴断面 | 図版7 ①一号土坑断面図(SK01) |
| 図版3 ①SB01建物跡、柱穴断面 | 図版8 ①出土遺物 |
| ②SB01建物跡、柱穴断面 | 図版9 ①出土遺物 |
| 図版4 ①SB01、SB02建物跡(東から) | 図版10 ①出土遺物 |
| ②SB02建物跡、柱穴断面 | 図版11 ①出土遺物 |

第2編

- | | |
|--------------------|------------------|
| 図版1 ①左辺形・右一の郭(北から) | 図版3 ①二の郭東空堀(北から) |
| ②空堀(南から) | ②石臼 |
| 図版2 ①一の郭・空堀(西北から) | |
| ②一の郭・空堀(西南から) | |

至郡山

至郡山

至牧の内



至白河

至白河

第1図 国土地理院（5万分一）図

第1編 大和久遺跡

第1章 位置と環境

第1節 遺跡の位置と地理的環境

大和久館及び大和久遺跡は、矢吹町大字大和久字堰の上にあり、東は東北自動車道に接している。館跡は大和久丘陵の最高所にあり、南部は大信村に接している。この館跡の南は隈戸川が西方の中新城から東に流れ、館のある丘陵の東麓でカーブし北流する。

矢吹町の丘陵・台地と低地はそれぞれの地形に対応した地質によって構成されている。丘陵は石英安山岩質の凝灰岩とこの二次堆積物から構成されており、台地は礫・砂・粘土といった埋積谷堆積物で構成され、また新しい低地については、阿武隈川・隈戸川流域は砂・礫で構成されており、台地を刻む谷の低地は、砂・シルト粘土で構成されている。

第2節 歴史的環境と付近の遺跡

矢吹町の歴史は陣ヶ岡遺跡から発見された成田型刃器によると、その年代は約3万年前にまで溯るもので、歴史の古さを物語るものである。

その後縄文時代になると下荒具C遺跡の縄文早期の遺跡があり、松房池上、西原、渡池、赤沢山など前期の遺跡もみられる。中期は向原、北釜遺跡があり、後晩期には柏山、オムロ前、赤沢など古い時代の遺跡が多い。

弥生時代は米作が始まられ、豪族の発生につながる重要な時代である。一本木遺跡、赤沢山遺跡、愛宕下遺跡、カヤマ遺跡等があげられる。

古代に入ると地方豪族が最も栄えた時代とされる古墳文化をあげることが出来る。谷中古墳群、鬼穴古墳群、塚原古墳、塚の越古墳群、甲三ツ段古墳群、弘法山古墳群、寺山古墳、下荒具古墳群、久当山横穴古墳群、沼和久横穴古墳群などがある。

さて大和久遺跡同一時代と考えられる奈良・平安時代の遺跡は矢吹町全町に所在していると考えられ、重なものを挙げると明新地内の乙江沢遺跡、神田地内の岡の内遺跡、谷中地内の谷中遺跡、三城目地内の吉作遺跡、古館遺跡、中畑地内の行馬遺跡、下荒具遺跡、国神遺跡、松倉地内の寺山遺跡、田内地内の芹沢遺跡・北の内遺跡、柿之内地内の上ノ原遺跡それに大和久地内の三峯森遺跡、堰ノ上遺跡、狐石遺跡をあげることができる。

大和久の三峯森・堰ノ上・孤石の3遺跡は昭和45年夏東北自動車道の建設に伴って、事前に発掘調査が行なわれた。

狐石遺跡

昭和45年6月発掘調査が行なわれた遺跡は、隈戸川西岸の東面した斜面に発見された遺跡である。

4基の住居跡があり平安時代前期と考えられ、土師器、須恵器、釘、耳皿等が発見されている。1号住居跡7m四方の竪穴住居、2号住居跡は南北5.6m、東西3.7mの隅丸方形、3号住居は2号住居と切合っており、4.8m×4mの竪穴住居、4号住居は3m四方の小形な竪穴住居である。

井戸尻遺跡

隈戸川を見下ろす丘陵の舌状台地上にあり、水田との比高は10mに及ぶ高さである。2基の住居跡があり1号住居は東西5.2m×南北4.8mの竪穴住居である。これに切合う2号住居跡は北西部で切合っているが大きさは不明である。遺物は土師器の壺、長甕が出土している。

堰の上遺跡

昭和45年5月調査が行なわれた。遺物は奈良時代末から平安初期にかけての遺物が出土している。住居跡は2基で1号住居跡は1辺約4mの隅丸方形の竪穴住居である。2号住居跡は1号と切合い1辺4.5mの竪穴住居である。

第3節 文献に残る矢吹の古代と中世

古代陸奥国は現在の東北地方6県の範囲であった。大化の改新によりはじめて置かれた国を道奥国と呼んだという。和銅5年出羽国が陸奥国から割かれ、養老2年(718)には陸奥国を3国に分割し陸奥、石城、石背の3国を置いたことが続日本紀により明らかである。

石背国は白河、石背、会津、安積、信夫の5郡からなっていた。しかしこの石背国は永くは続かず約10年後には再び陸奥国に合併されたと考えられ、以後石背国の記事は史書には出て来ない。

白河郡は陸奥国では一番大きな郡で、17郷を有して大郡に位置付けられている。大村郷、丹波郷、松田郷、入野郷、鹿田郷、石河郷、長田郷、白川郷、小野郷、駅屋郷、松戸郷、小田郷、藤田郷、屋代郷、常世郷、高野郷、依上郷からなっている。

白河郡の郡家は泉崎村閑和久にある閑和久遺跡であることが、福島県教育委員会の永年に渡る調査により明らかにされた。

矢吹地方は和名類聚抄などの古記録に残された郷名から推定するならば、東部は松戸郷、西部は小田郷に所属していたものと考えられる。

東部松戸郷に所属する地域は中畑を中心とした地域、小田郷は白河市的小田川、大田川

矢吹町の大和久、矢吹などと考えられている。特に大和久地区は遺跡の多い地域で、東北自動車道の建設に伴なう遺跡の発掘調査により、「狐石遺跡」「井戸尻遺跡」「堰ノ上遺跡」「三峯森遺跡」など古代の遺跡が付近に在ることが明らかであった。

古代の奈良平安時代、陸奥国南部は中央の阿部・大伴氏の勢力下にあり、神護景雲3年(769)安積郡の丈部直継足（はせつかべあたいのつぐたり）、信夫郡の丈部大庭が阿倍安積連、阿倍信夫臣の姓を賜わり、宝亀3年(772)白河郡の駆大伴部継人（ゆきおおともべのつきひと）が駆大伴連の賜姓をうけている。

平安時代に入ると延暦16年(797)白河郡の大伴白河連の賜姓、安積郡の丸子部古佐美・大田部山前への大伴安積連の賜姓、次いで嘉祥元年(848)白河郡の郡司奈須直赤竜、岩瀬郡の權大領丈部宗成・信夫郡の大田部月麻呂等が阿倍陸奥臣の姓を賜っている。

このことについて矢吹町史は、これらの事実は安積・岩瀬・白河の地域の郡司や豪族たちが阿倍氏の勢力下にあったことを示す。同族の関係からこれら諸豪族が北奥の六郡の司安倍氏に連携して共同の軍事行動を採った可能性は、かならずしも皆無とはいえないとしても、現実には安倍氏の勢力がそれほど南下していないと考えている。

大和久遺跡の古代集落跡と阿倍氏の関係は明らかではないが、白河郡の支配下にあった古代遺跡と考えられよう。

古代末になると陸奥国の豪族の動きがはげしくなり、何回かの東征が行なわれるようになる。特に矢吹と関係のある前九年の役は、源頼義が天皇の命により11万騎の大軍を率えて、安倍氏を追討するために陸奥国へ下った。これを向え討つ安倍貞任は厨川の城を出發して安達に木戸を立て行方の原に馳せ向い、源氏を迎へ待った。これを討つ駿河国の住人高橋大蔵太夫は500余をもって白川閥をうち越え、行方原に攻め込み安倍貞任を攻め敗ったという。

この前九年の役の功によって石川庄を賜った石川氏は、源頼義に従って厨川の戦で戦功を立てた石川頼遠は河内国石川郡に住していたが、康平5年(1062)56才で戦死した。その子有光も父とともに従軍し、戦功を立て功によって従五位下安芸守に任せられ、石川庄を賜り、藤田に城を定めた。

石川氏と矢吹

記録上に石川氏と矢吹の関係が出てくるのは鎌倉時代に逆のほると考えられ、承元3年(1209)に矢吹地区の堤・給当が石河庄として記録に出てくる。

大和久郷

大和久は中世を通じて白河郡に属しており、石川郡には所属したことは無かった。宮城県古川市熱海孫十郎氏所蔵の関東下知状に可令早結城拱津守盛広領知令可、陸奥国白河

庄□富（宮？）沢・真角・大和久・葉太・大田河・小田川・跌増・赤丹沢等郷・田中・鈎尾・飯土用・深谷等村地頭職事、

□申状者、去年十一月十二日富沢郷宿所炎上之刻、彼譲状文等紛失云々、爰如白河上野前司宗広今年文保二年正月□請文者、当所等相伝知行相違無、且去年十一月十二日盛広□炎上之条、無異儀調度・証文等紛失之由、之承云々 起請詞之略者、不及子細、早守先例可令掌、之状依仰下知件如

文保二年二月十六日

相模守平朝臣（北条高時）

武藏守平朝臣（北条貞頼）

（文保2年－1318－鎌倉幕府が白河庄富沢以下の郷村に対する結城盛広の領知を認めた下知状。矢吹町に属する大和久郷が白河庄の内として結城氏の所領であったことを示すものである。）

さてこのように中世の矢吹地方はその大部分は石川氏の領地であったのに、石川氏の仙道の拠点矢吹に隣接して、白河北結城氏の出城が大和久にあったことは興味深いものがある。また文禄3年（1594）「蒲生領高目録」でも三城目・大和久は白川郡となっている。

第2章 調査の経緯

第1節 調査に至るまで

東北自動車道矢吹インターインターの北方に当り、大信村に通じる県道の北西方に位置する丘陵地帯に、広がる中世の館跡として知られている。

ここに地元の矢吹町中町、県南開発KKが工場用地を開発する計画を立て、矢吹町教育委員会に遺跡の調査について協議を行なった。矢吹町教育委員会が現地調査を行ない、館跡については、矢吹地方の歴史上非常に貴重な遺跡であるため、本丸を中心とする地域一帯を開発工事から除外し、現況のまま保存することとした。

次いで本丸を中心として広がる東部地域の平場の遺跡所在調査を実施したところ、土師器、須恵器等の破片が発見され、散布地として予備調査をすることとした。

第2節 試掘調査

昭和57年4月19日から4月24日まで5日間の予定に実施することとし、平場全体に2m四方のトレンチを19ヶ所設定する。全体的に黒色の腐食土が深く、遺構の検出は困難であったが13号・14号・15号・17号の各トレンチに掘立柱の掘方と考えられる遺構が検出され、今回予備調査を行なった平場には、古代の遺跡が所在する可能性が強くなつたため、日を

あらためて発掘調査を実施することに決定した。

第3節 本調査（昭和57年）

5月21日～5月27日

大和久三角点を確認し遺跡及び館跡に基準杭を設定する。次いで基準杭にレベルを移し記録する。

平行して遺跡全体の立木の伐採を進める。さらに一班を編成し中世の大和久館の遺構を平板測量により作業を進める。

5月28日～5月30日

館跡に通じる東道型の平板測量を実施併せて立木伐採を行なう。

5月31日～6月5日

遺跡の伐採立木の整理及び伐根のため、バックホー1台、ブルトーザー1台を使用し作業を進める。

6月7日～6月25日

館跡本丸及び西部道型の平板測量を行なう。

6月28日

大和久遺跡調査実施の為、テントを設営し発掘作業用具等を搬入する。

6月28日

バックホー1台、ブルトーザー1台の計2台により残土整理を行ない、グリットを設定する。グリットは遺構が存在すると考えられる平場を中心とする平坦地に重点的に設定したため、地形に応じて杭を打った。

グリットは東西6、南北5とし、一辺10m四方とし、No.1～No.26まで設定した。

6月30日

遺跡の中心と考えられるNo.6から素掘を実施。

7月1日

No.18、No.11、No.12、No.16の素掘作業を実施した。

7月2日～7月15日

前日来、素掘を引き続き実施し、精査に移る。No.19、No.20、No.21、No.22の各グリット全面に柱穴を検出する。

7月16日～7月20日

前日まで精査によって検出された柱穴を含むピットを半裁し、セクションの線引きを行なう。

7月21日～7月23日

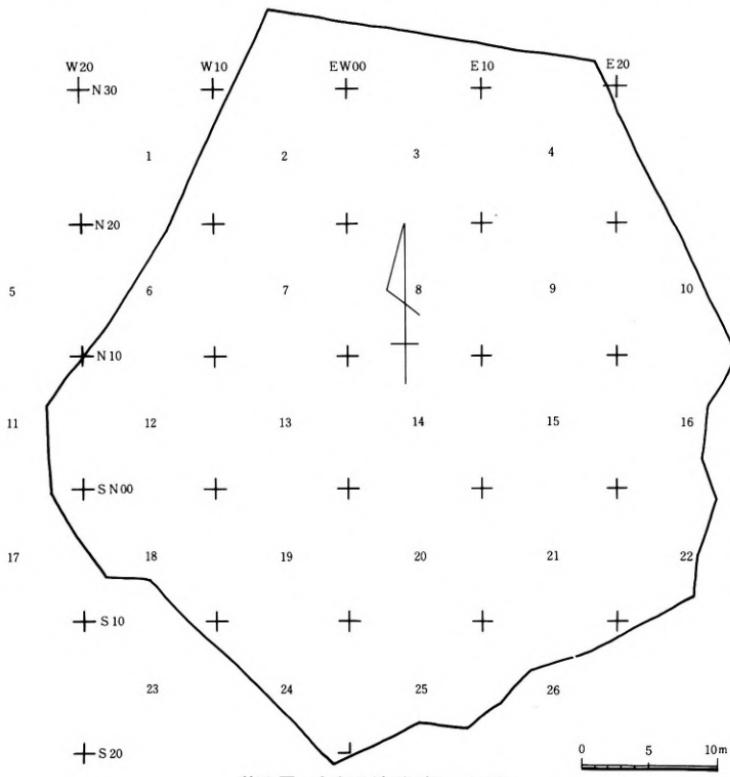
各柱穴・ピットの断面図の実測と平行し、各柱穴・ピットの平面図の実測を行なう。

第3章 発見された遺構と遺物

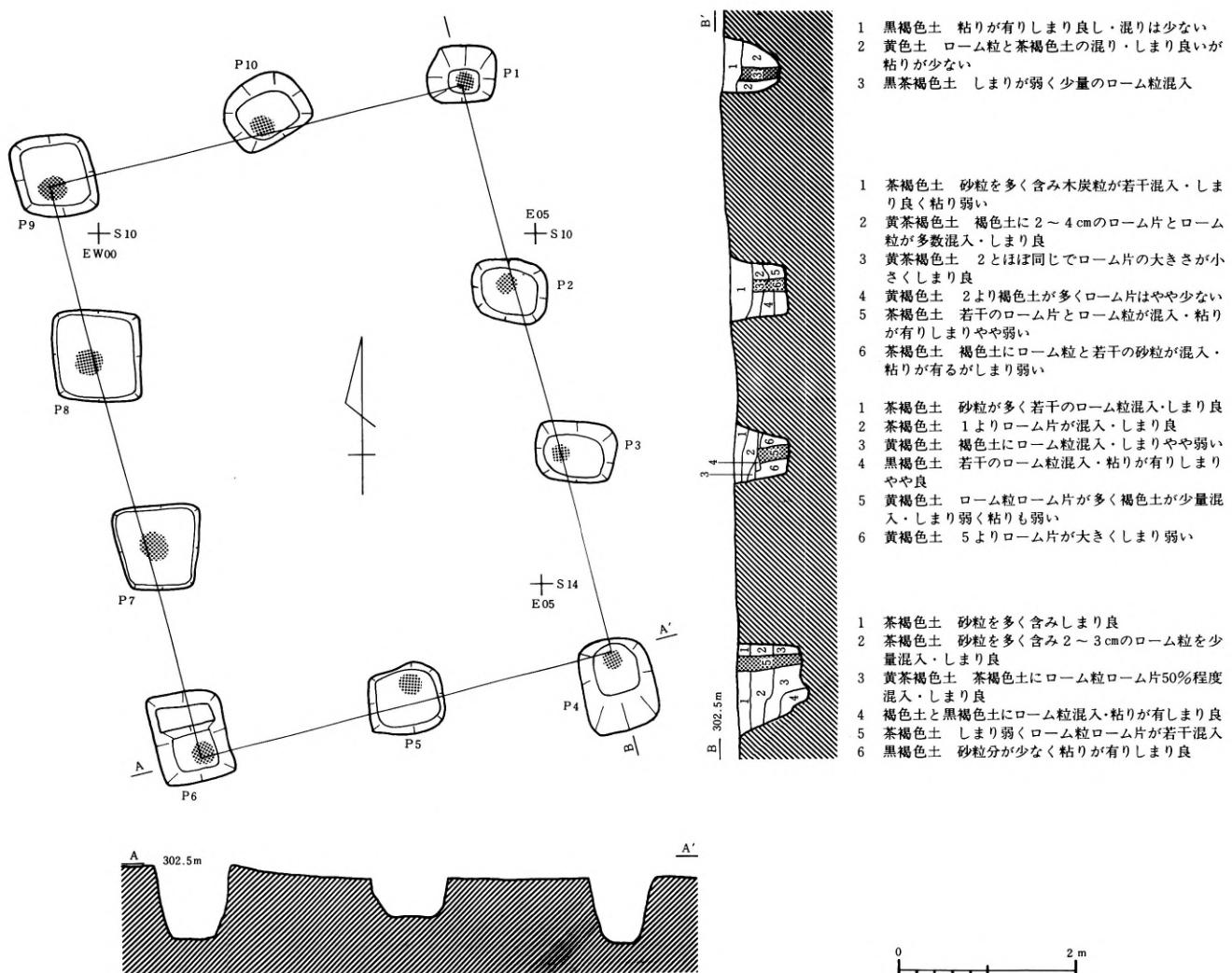
第1節 遺構 古代

遺跡全体に柱穴及びピットが検出されたが、竪穴住居は1棟も発見されなかった。

柱穴を持つ建物跡は3棟、使途不明ピット2基である。それ以外の柱穴は建物として考えるのは資料不足であるため、遺構が明らかな建物についてのみ述べることとした。



第2図 大和久遺跡グリッド図



第3図 SB01 (1号建物跡) 実測図

建物跡

S B 0 1 (1号建物跡)

調査区南西部に検出された。間数は南北3間、東西2間で主軸方向はN12°Wである。間尺は平均8尺ほどである。柱穴掘り方の大きさは平均1m×1m前後柱痕平均20cmで、今回調査の建物のなかでは最も大きいものである。掘り方の深さはP1を除いて四隅が深い。この中間の柱穴はやや浅く掘られている。

S B 0 2 (2号建物跡)

調査区東部中央に検出された。間数は東西・南北がそれぞれ2間で、主軸方向はN7°Wである。間尺はいづれも2.1m(7尺)である。柱掘方はP4・P8を除いてその大きさは50cm四方である。柱痕はいづれも20cmあり掘方の深さはP7を除いて四隅が深くその間はやや浅い。P8・P4は柱痕は他と同じく20cmあり深さは10cm前後と浅い。間柱か、何等かの入口施設があったものかと考えられる。

S B 0 3 (3号建物)

調査区東部に検出された。間数は南北3間、東西2間で主軸方向はN3°Wである。間尺は平均に1.8m(1間)である。柱穴掘方の大きさは平均50cm四方あり、柱痕は25cmと他の建物よりはやや太い。掘り方の深さは西側の隅柱P1、P7がやや深く東側隅柱P6、P3は浅く、東側中間のP5が深い。

S A 0 1

S B 0 1(1号建物)に伴なう棚と考えられる遺構である。柱間2間S B 0 1から北方2.8mにあり掘り方は平均70cm前後あり、柱間は西側1.5m、東側1.8mと一定していない。

S A 0 2

S B 0 2、S B 0 3の北方9mにあり、東西3間の棚と考えられる遺構である。柱間約1m、柱穴掘方は60cmと小さい。S B 0 2、S B 0 3との関係は不明である。

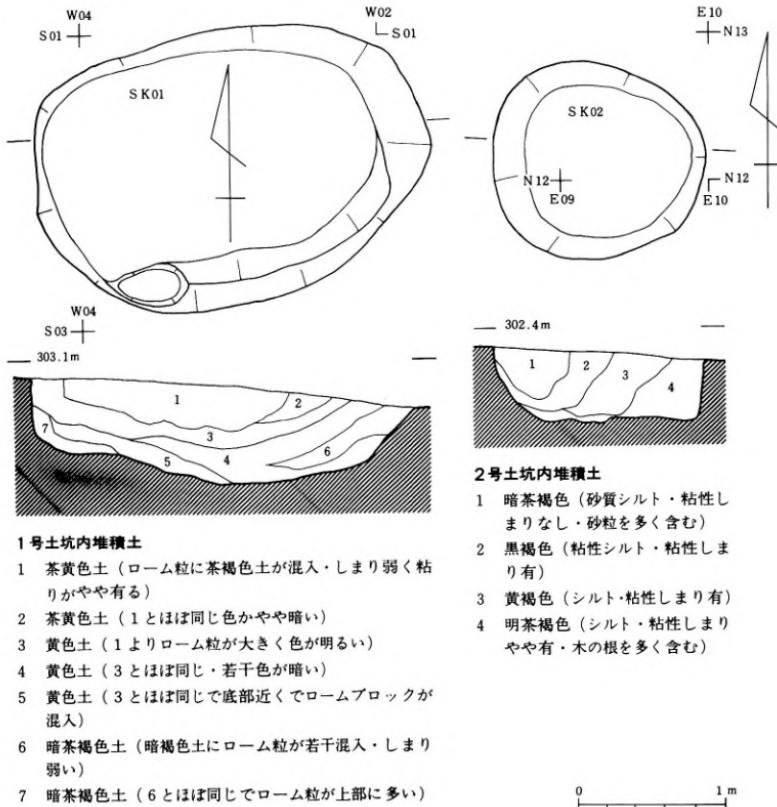
S K 0 1 (1号土坑)

遺跡の西部から検出された土坑で、東西2.65m、南北1.9m、深さ67cmの楕円形を呈している。断面形は船底状を呈している。セクションに表れた土層の堆積状況は、黒色土の

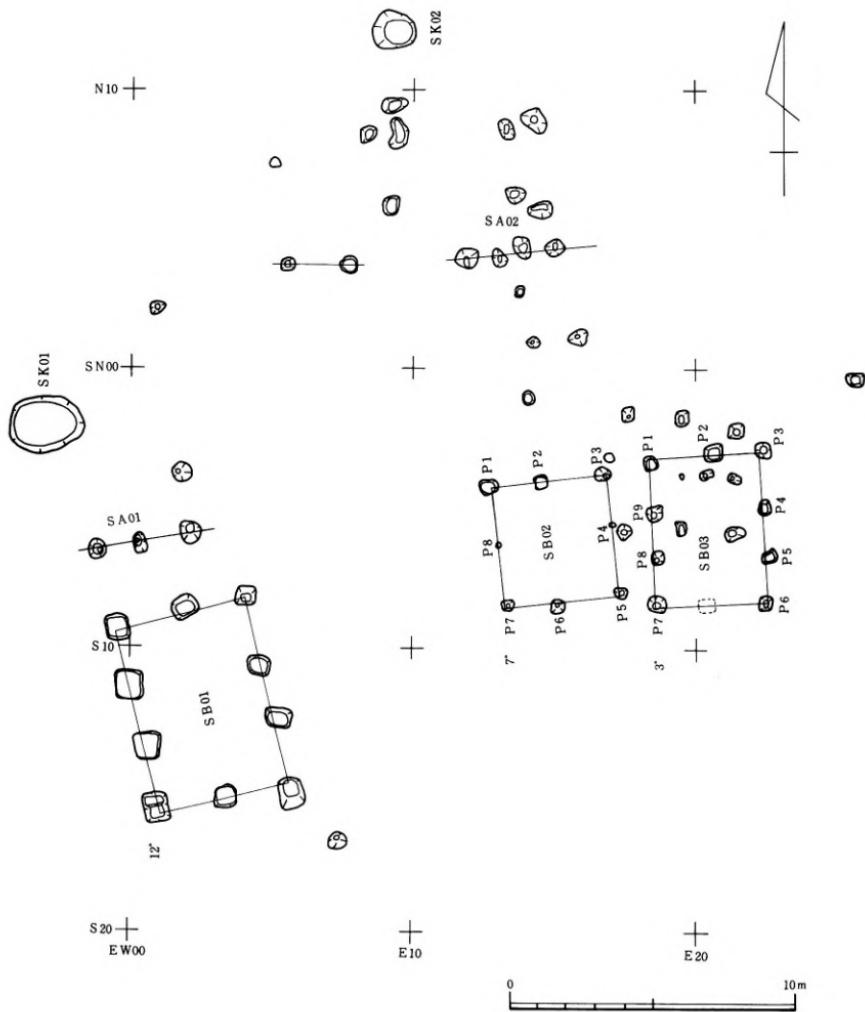
中にロームブロックが混入しているところから考えて、人工的に埋没したものと考えられる。遺物は1点も検出されないため時期は明らかでない。また土坑の用途等も不明である。

S K 0 2 (2号土坑)

遺跡の北部に検出された土坑で、直径1.4m、深さ50cmの土坑である。土坑内の土層は砂質シルト質である。遺物は1点も発見されず、時期は明らかでない。また土坑の用途等も不明である。



第4図 土坑実測図



第5図 遺構配置図

第2節 大和久遺跡の遺物について

大和久遺跡から発見された遺物は、すべてが掘立柱建物に伴なうものである。従って遺構と遺物の共伴関係が不明なものもある。

土器は土師器と須恵器が遺構全面から検出されており、土師器は壺形土器、甕形土器を主とし、須恵器は甕形土器、壺形土器、高台付壺等が検出されている。

土師器の壺は内面黒色処理をほどこしたものと、両面黒色処理のものがあり、有段丸底、丸底、底部、体部回転ロクロ調整のものが検出されている。

特に1点であるが漆紙付着の土師器の破片が検出されていること付記しておく。また縄文土器の破片が数点検出されている。

〔土師器〕

壺1（第6図）

全体の約 $\frac{1}{3}$ の破片を復元実測した。底部より口縁部にかけて広がりをもつ。外面体部にはっきりとした段を有する。内面に軽い稜線が見られる。外面の段より上部は横ナデ、下部はヘラケズリ調整が施されている。内面は黒色処理後、多方向の丁寧なヘラミガキが施されている。色調は外面白黄褐色で焼成は堅い。

壺2（第6図）

グリット14、2層より出土、全体の約 $\frac{1}{3}$ 残存を実測した。外面体部のほぼ中央に軽い段を有する丸底の壺である。口縁部は直線的な広がりを持つ。段より上部は横ナデ、下部は手持ちヘラケズリが施されている。内面は黒色処理後、底部は多方向のヘラミガキ、体部は横一方向の丁寧なヘラミガキが施されている。色調は、外面黄茶褐色で焼成は堅い。

壺3（第6図）

グリット15、ピット8より出土、全体の約 $\frac{1}{3}$ の破片を復元実測した。底部より口縁部にかけて広がりをもつ壺である。外面体部のほぼ中央に、軽い段をもつ丸底の壺と思われる。体部中段に技法上のキズ痕あり。段より上部は横ナデ、下部を手持ヘラケズリをしている。内面は体部、底部共、横一方の丁寧な横ミガキが施され、黒色処理はされていない。色調は内外面共、明橙褐色で焼成は堅い。

壺4（第6図）

グリット15、2層より出土した一片と、グリット7、2層より出土した一片の接合で、全体の約 $\frac{1}{3}$ を復元実測した。底部より口縁部にかけて広がりをもつ壺である。外面体部のほぼ中央に軽い段をもち、底部は丸底を呈する。体部の中程に技法上のキズ痕が見られる。外面体部の段より上部に横ナデが施され、底部はヘラケズリされている。内面はヘラミガ

キが施され、黒色処理はされていない。色調は内外面共、黄褐色で、胎土は粗く、焼成は堅い。

坏5（第6図）

グリット15、2層より出土した一片と、グリット21、ピット内より出土した一片の接合で、約 $\frac{1}{2}$ 残存の破片を復元実測した。底部は残存が少ないが、外面体部に軽い段を有する丸底の坏と思われる。口縁部は立ち上がりが短かく、内反気味である。外面段上が横ナデ、下部をヘラケズリしている。内面は黒色処理後、丁寧なヘラミガキが施されている。色調は灰褐色を呈し、焼成は良好である。

坏6（第6図）

グリット20、2層より出土した約 $\frac{1}{2}$ 残存の破片を復元実測した。残存が少ないが、外面体部に軽い段を有する丸底の坏と思われる。底部より丸みをおびて立ち上がり、口縁部でわずかに外反する。外面段より上は横ナデ、下部をヘラケズリしている。内面は黒色処理後、不定方向への丁寧なヘラミガキが施されている。外面色調は白黄褐色を呈し、焼成は良好だが、胎土はやや粗い。

坏7（第6図）

グリット7、2層より出土し、全体の約 $\frac{1}{2}$ の破片を復元実測した。若干丸みをおびた体部から、直線的に立ち上がり、短い口縁部をもつ皿状の坏と思われる。外面底部にヘラケズリが施されている。外面中程に軽い稜線が見られる。内外共、黒色処理後、ヘラミガキが施されている。焼成は良好で堅い。

坏8（第6図）

グリット15、2層より出土し、全体の約 $\frac{1}{2}$ の破片を復元実測した。偏平な体部と、わずかに外に開いた短い立ち上がりの口縁部をもつ皿状の坏と思われる。内外共、黒色処理後ヘラミガキが施されている。焼成は堅く、胎土は緻密である。

坏9（第6図）

グリット15、2層より出土した約 $\frac{1}{2}$ の破片を実測した。底部は平底風丸底を呈し、体部は口縁部へゆるい丸味をもって立ち上がり広がる。外面口縁部は横ナデ、体部は手持ちヘラケズリ、内面は丁寧なヘラミガキが施されている。焼成は良く堅く、胎土は密である。色調は内外面共、橙褐色を呈している。

坏10（第6図）

グリット21、ピット10内より出土した約 $\frac{1}{2}$ の破片を復元実測した。底部より口縁部へ丸みをもって内反気味に立ち上がる。成形ははっきりしない。調整は外面ヘラケズリ後、丁寧な内面体部、多方向へのヘラミガキが施されている。焼成は良く堅い。内面は黒色処理が

施されている。

坏11（第6図）

グリット15、2層より出土、全体の約 $\frac{1}{3}$ の破片を復元実測した。体部は丸味をおびて、口縁部にかけて若干内彎する。底部は平底の坏である。外面底部から、立ち上がりの体部面にはっきりしたヘラケズリ痕が見られる。外面底部と体部の境に稜線が見られる。内外面共黒色処理後、ヘラミガキが施されている。器厚がある。焼成は良好で堅い。

坏12（第7図）

グリット7、2層より出土した一片とグリット15、ピット10内より出土した約 $\frac{1}{3}$ の破片を復元実測した。底部は平底、底部と体部のみの破片である。体部の一部に軽い段が見られる。外面は手持ちヘラケズリされ、内外面共黒色処理の後、ヘラミガキが施されている。焼成は堅い。

坏13（第7図）

グリット15、2層より出土した約 $\frac{1}{3}$ の底部、体部を復元実測した。底部は平底の坏である。外面は底部、体部共手持ちヘラケズリされ、内外面に黒色処理が施され、底部外面は横へのヘラミガキが施されている。焼成は良好で、胎土はやや粗く、断面色調は茶褐色。

坏14（第7図）

S B 0 1、ピット7内より出土した約 $\frac{1}{3}$ の底部、体部を復元実測したが、破片で小さい。外面体部は手持ちヘラケズリされ、内外面共、黒色処理が施されている。焼成は良好で、胎土は緻密である。

坏15（第7図）

S B 0 1、ピット1内より出土。底部から体部へ約 $\frac{1}{3}$ 残存、口縁部が欠損のものを実測した。底部より体部へ内彎気味に立ち上がる。底部、体部共手持ちヘラケズリされ、内面が黒色処理の後、ヘラミガキされている。外面色調、黄褐色で胎土は粗い。

坏16（第7図）

グリット15、2層とS B 0 1、ピット9内より出土した破片の接合（底部と体部）の約 $\frac{1}{3}$ を復元実測した。底部は平底の坏である。外面の底部と体部下端に手持ちヘラケズリが施されている。色調は白黄褐色で、焼成は普通で胎土はやや粗い。

坏17（第7図）

グリット15、2層とグリット15、ピット6内から出土した破片の接合で約 $\frac{1}{3}$ を実測した。底部より口縁部へ直線的に外彎する坏である。ロクロ成形による。外面体部は回転ヘラ調整が施され、体部下端に調整時のキズ痕が見られる。底部は残存が少なく不明である。内面は黒色処理後、横一方向の丁寧なヘラミガキが施されている。外面色調は白褐色で、焼

成は普通で胎土が粗い。

坏18 (第7図)

トレンチ11、2層より出土した体部と底部のみ約 $\frac{1}{3}$ を実測した。底部より口縁部に、直線的に広がりを持つ。ロクロ成形で、底部と体部下半に回転ヘラ調整が施され、切り離しは回転糸切り痕を残し、底部にヘラ状工具による線刻が見られる。内面は黒色処理後、底部に横一方向、体部は多方向へのヘラミガキが施されている。焼成は良好、外面色調は橙褐色を呈する。

坏19 (第7図)

グリット6、2層より出土した約 $\frac{1}{3}$ の小型の坏を実測した。平底から直線的に外斜して立ち上がる。外面に粘土巻き上げ痕がみとめられ、軽いナデが施されている。内面は口縁部は横ナデ、体部から底部に、ヘラ状工具による沈線が等間隔に施され、放射状を呈する。底部切り離しは不明であるが、手持ちヘラ調整痕がみられる。色調は内外面共、明橙褐色で、内面口縁部にスヌ状の付着物がみとめられる。焼成は良好である。

坏20 (第7図)

グリット14、2層より出土した約 $\frac{1}{4}$ 、体部、口縁部のみの破片を復元実測した。内外面共、ロクロの線が數本みられる。内面は黒色処理が施されているが、磨滅がはげしく器厚が薄い、焼成は悪く、胎土が粗い。色調は白黄褐色である。

坏21 (第7図)

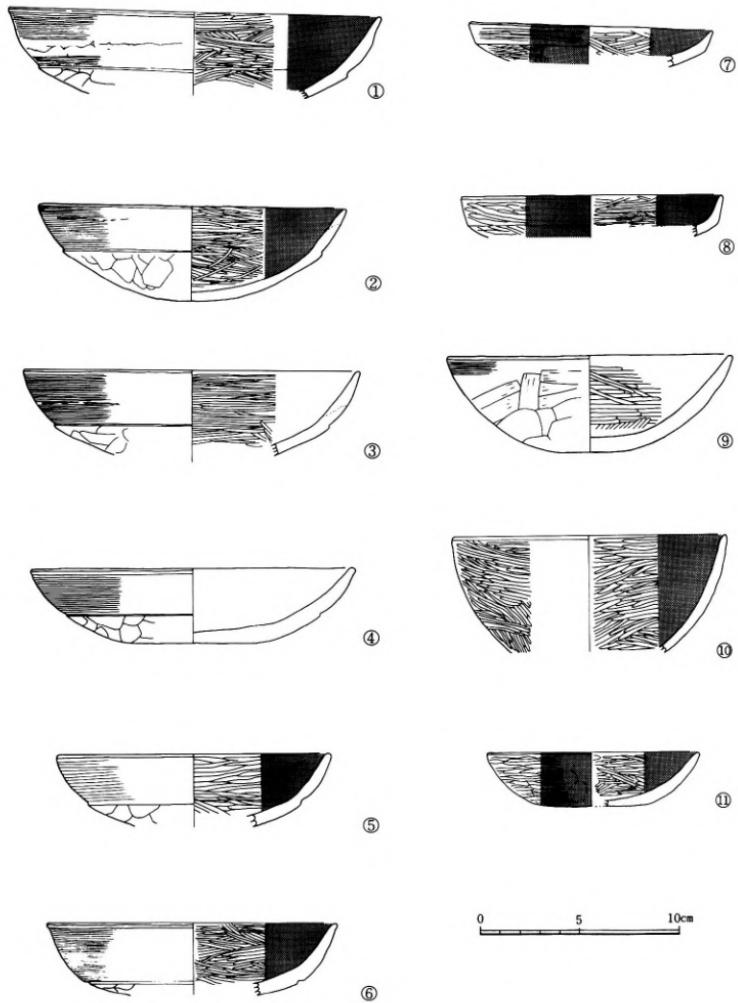
グリット19、2層より出土した約 $\frac{1}{3}$ の小型の坏を実測した。底部は平底で、口縁部がやや外唇氣味に立ち上がっている。全体的に肉厚で、外面体部は横ナデ、底部はヘラケズリが施され、内面はヘラミガキがされている。明黄褐色で焼成は良好である。

壺型土器22 (第7図)

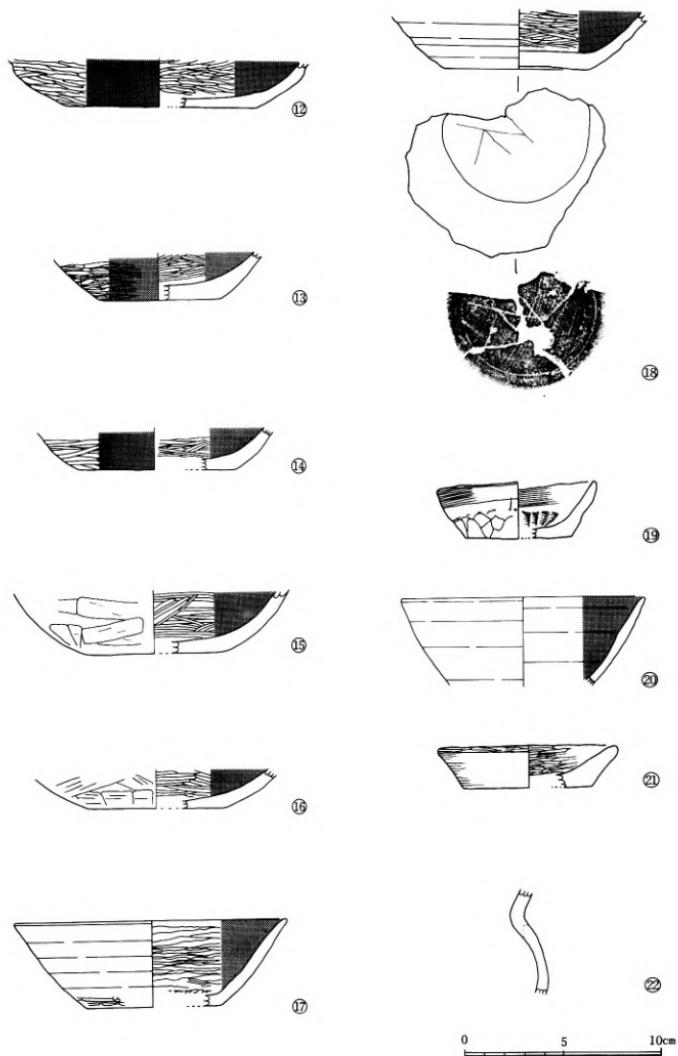
グリット15、2層より出土した小片の断面を実測した。形は不明だが壺型土器と思われる。外面に縦線のヘラケズリ痕が一部にみられる。内面はヘラ調整が施されている。色調内外面共、明橙褐色で、胎土はやや粗い。焼成は普通。

甌

甌の底部 $\frac{1}{2}$ の破片である。竹管の様なもので数個の穴があけられている。



第6図 土師器実測図



第7図 土師器実測図

〔須恵器〕

壺1（第8図）

グリット15、2層より出土した。頸部、口縁部の約 $\frac{1}{3}$ を復元実測した。器形は口縁部近くで大きく外反し、口唇部で垂直に立ち上る。胎土は全体的に緻密であるが若干の小礫が含まれている。焼成は良好で、色調は外面青黒色、内面青緑色を呈している。内外面に自然釉がかかっている。

高台付壺2（第8図）

底部と体部約 $\frac{1}{3}$ 、口縁部一部残存の破片を接合し復元実測した。底部周辺に若干張り出した低い高台を有する壺である。底部より口縁部に直線的に広がりを持つ。体部下半に輪づみ痕が見られる。底部は内外面共回転ナデ調整が施されている。内面一部に熱による斑点が見られる。色調は内外面共黄褐色、胎土は緻密である。焼成は悪い。

壺3（第8図）

グリット15、2層より出土、頸部、口縁部の約 $\frac{1}{3}$ の破片を図上復元した。器形は頸部で「く」の字状に外反し、口唇部下端に小さくつまみ出された状態で口唇部に一条の沈線を巡す。胎土は全体的に緻密で若干の小礫が含まれている。焼成は良好で、色調は外面黒青灰色、内面青茶灰色を呈している。

壺4（第8図）

グリットN、2層より出土底部と体部の一部約 $\frac{1}{3}$ を復元実測した。底部周辺に外方に張り出す高台を有し、底部から、ゆるやかに内彎して体部に至る。高台はハリツケによる。体部は内外面共回転ナデ調整が施されている。焼成は良好で胎土は若干砂粒を含み、色調外面灰褐色、内面灰黄褐色を呈している。

壺5（第8図）

グリット2北より出土した。体部下位（高台部欠損、底部一部残存）のみ約 $\frac{1}{3}$ を実測した。底部より弱い丸みをもって立ち上がる。体部下半は内外面共回転ナデ調整が施されている。高台はハリツケによると思われる。底部切り離しは不明、体部外面に自然釉がかかり、水引き痕が見られる。胎土は砂粒及び小礫を含む。色調外面は黒青色、内面青灰色を呈する。

壺6（第8図）

グリット2、2層より出土した。頸部はゆるやかに外反し、口縁部手前で下方に折り返し端部に至る。手法の特徴としては回転ナデ調整が施されている。焼成は良好で堅緻。胎土は緻密であり外面一部に自然釉がかかり、仕上げは比較的丁寧である。色調は外面青灰色、内面灰色を呈している。

蓋7（第8図）

グリット15、2層より出土した。小片の接合、約 $\frac{1}{3}$ を実測した。鉢部欠損で、天井部はなだらかな脹らみを持ち、口唇部で垂直を呈す。内外面共回転横ナデ調整の丁寧な水引き痕を有する。色調は内外面共黒灰色、一部白黄灰色を呈している。焼成が悪いが胎土は緻密である。

壺型土器8（第8図）

グリット12、ピット4内より出土した頸部が短い壺形土器と思われる。頸部と口縁部の約 $\frac{1}{3}$ の破片を図上復元した。体部より頸部へほぼ直立気味の口縁部をもつ肩の張る壺と思われる。仕上げは比較的丁寧で体部内外面共ロクロによる回転ナデ調整が施されている。焼成は良好、胎土は緻密だが若干小礫を含む。色調は外面黒褐色、内面橙茶褐色を呈している。

壺9（第8図）

グリット15、2層より出土した底部と体部下位約 $\frac{1}{2}$ の残存を実測した。底部より体部へ緩やかに立ち上り全体の形の割合には底部が大きい壺である。底部は回転ヘラ切りで切り離し、外面体部下端と底部にヘラ調整が施されている。内面底部に丁寧な水引き痕が見られる。焼成は良好で胎土は緻密である。色調は内外面共白灰色を呈す。

壺10（第8図）

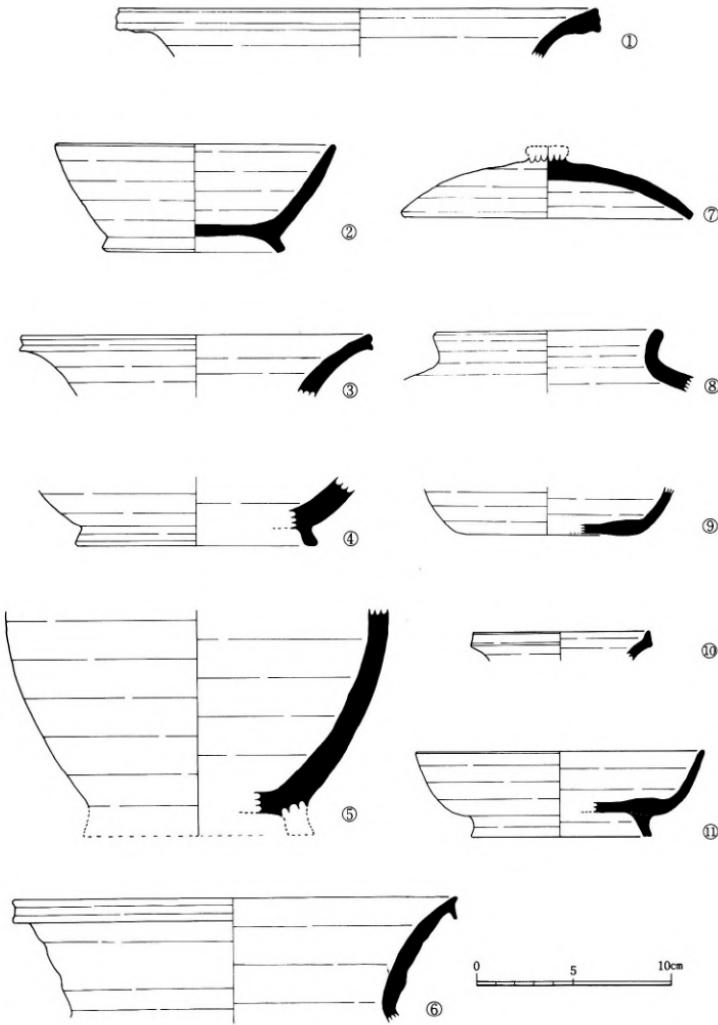
グリット25、2層より出土、口縁部の破片約 $\frac{1}{3}$ を複元実測した。口縁部へ大きく外反し、口唇部はほぼ垂直に立ち上がる。口縁部内面に一条の稜線を有している。色調は青灰色を呈し、胎土に砂礫が若干含まれている。焼成は良好。

高台付壺11（第8図）

グリット2、2層とグリット22、1層より出土した破片の接合約 $\frac{1}{3}$ を実測した。体部はゆるやかに内彎しながら立ち上り、高台は若干外に反る。壺付部は平で安定している。高台はハリッケによる。一部底部に歪みが見られる。底部内外面共回転ナデ調整が施されている。焼成は良好で堅緻、胎土に砂粒と若干の礫を含む。色調は内外面共青灰色を呈している。

壺12（第9図）

グリット2、2層より出土した体部と口縁部が現存約 $\frac{1}{3}$ を複元実測した。頸部は体部より強く外反し口縁部に至る。外面は縦線の平行叩き目紋が見られ、内面は輪ずみの接合痕がかすかに残る。体部上位から頸部にかけてヘラナデ調整、口縁部は丁寧な水引きによる横ナデ調整が施されている。色調は内外面共青灰色、焼成は良好で胎土は若干の砂礫を含む。



第8図 須恵器実測図

甕13（第9図）

グリット2、1層より出土した破片の断面を実測し外面を拓影した。外面に大きな波状紋が三段に施され、口縁部は強く外反し、口唇部で三角形断面をなす。焼成は堅緻で胎土に砂粒が多量に含まれる。色調は外面共青紫色を呈している。

甕14、15（第9図）

2片共甕の頸部上位の破片で、14はグリット2、15はグリット14の1層より出土しているが同一個体である。口縁部は強く外反し、すべて頸部に波状紋が施されている。焼成は良好で堅緻。胎土は砂粒と小礫が多量に含まれ、色調は内外面共青灰色を呈している。15は外面一部に自然釉がかかること。

甕16、17、18（第10図）

グリット2、11、14の2層より出土している。16は外面は格子叩き目紋、内面同心円叩き目紋を施す。17は外面縦線の平行叩き目紋、内面ヘラナデおよび同心円叩き目紋を施す。18は外面平行叩き目紋、内面同心円叩き目紋を施す。三点共大甕の胴部の破片である。焼成は堅緻で色調は灰色を呈している。

〔石器〕

砥石1（第11図）

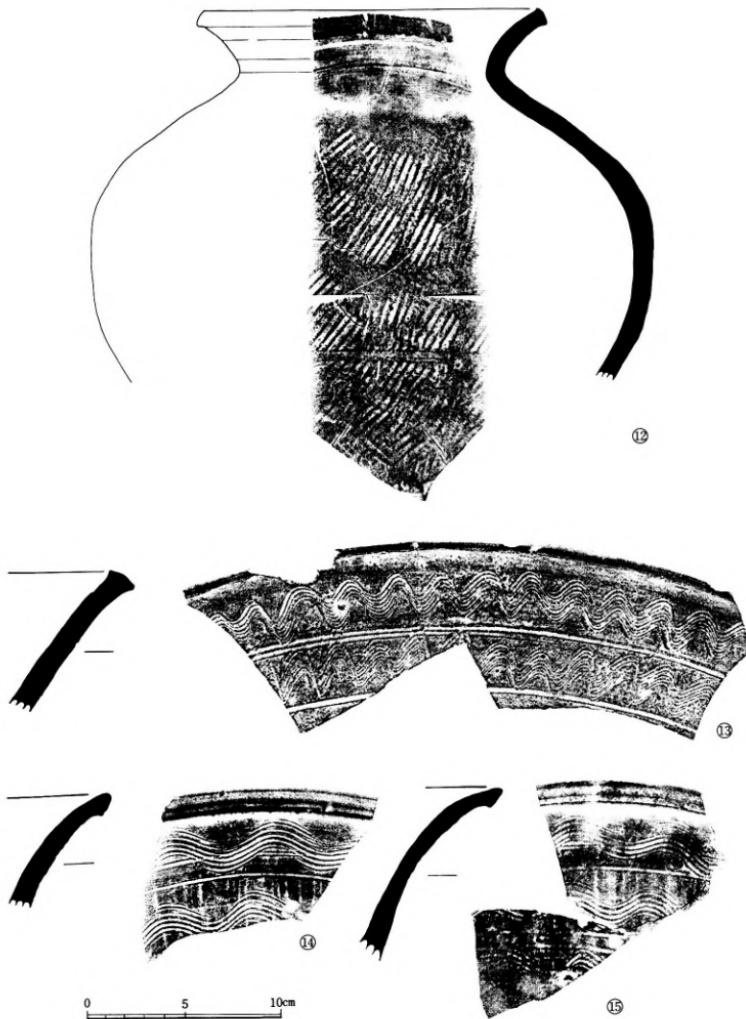
グリット15、ピット8内より出土、石質は泥板岩で長方体をなす。背面は欠損していて、三面研磨の部分が残存する。表面は数本の線刻痕が観察される。巾5cm、現在長は12cm。

砥石〔提継〕2（第11図）

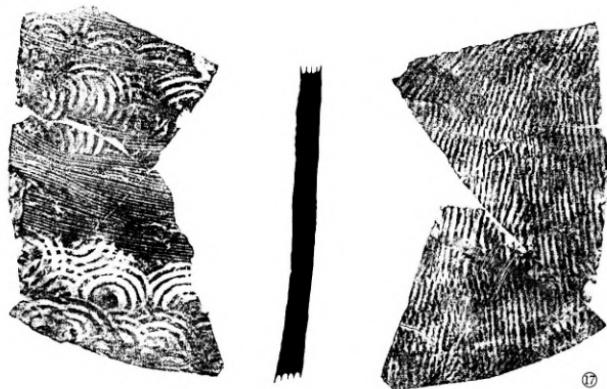
礪佩ともいう、長方形の板状に整形した砥石の一端に孔をうがって、腰からさげる様にしたもの。大和久から発見されたものは灰白色の泥板岩で、長さ3.6cm、巾2cmの角の破片であるが、提げ紐用の孔の残存が認められるところから、提砥と考えられる資料である。

砥石3（第11図）

グリット25、2層より出土、泥板岩の砥石と思われる。研磨面は四面で、片角が弧をえがく。巾6.3cm、現在長7.5cm。

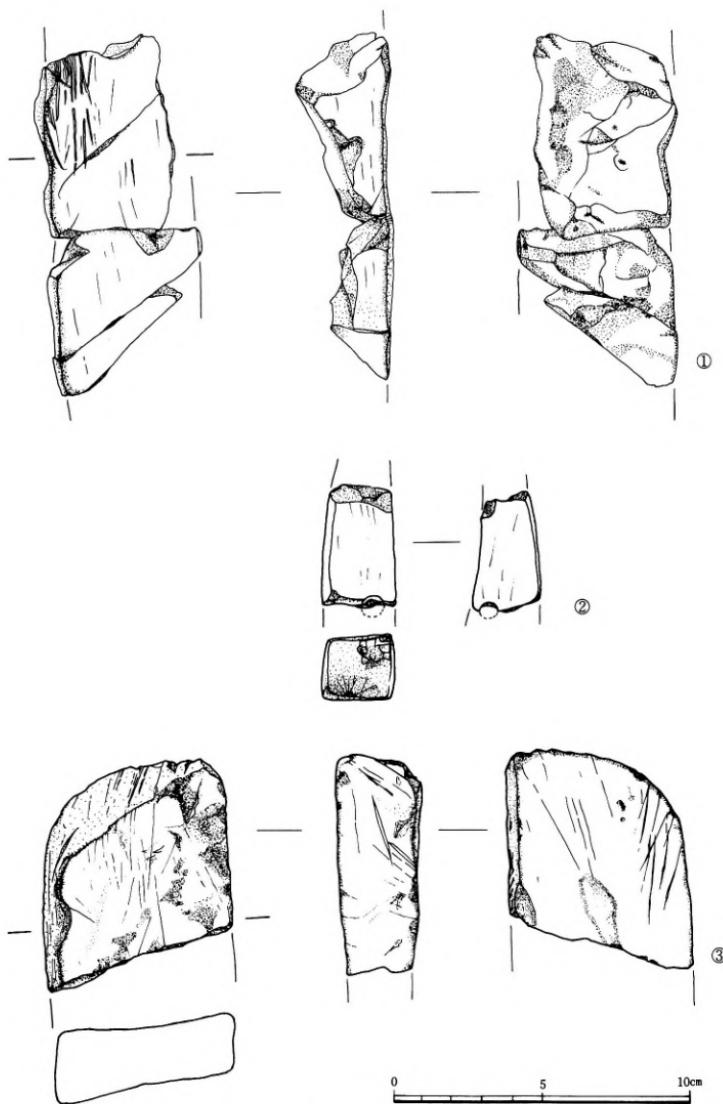


第9図 須恵器実測図



0 5 10cm

第10図 須恵器実測図



第11図 石器実測図

〔特殊遺物〕

古銭1（第12図）

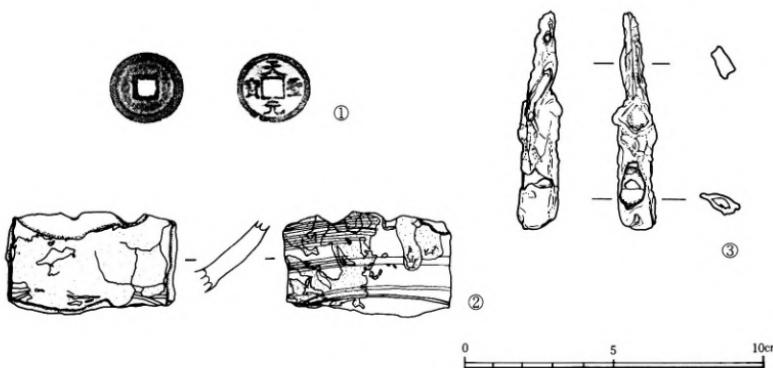
天聖元寶（宋） 1023年、宋の仁宗天聖元年に鋳た銅銭である。書体は真書と篆書の対銭の始めのものである。宋銭は鎌倉時代に幕府によって、宋国から輸入されている。

漆紙付着土器壺2（第12図）

グリット20、2層中央トレンチ内より出土した。破片の端の部分に軽い段がみられ、有段の壺と思われる。内外面に少量のうるし紙が付着している。内面は黒色処理が施され、外面は黄褐色、胎土は緻密で焼成は堅い。

鉄製品3（第12図）

グリット19、2層より出土したものを実測した。腐蝕がはげしいが鉄くぎと思われる。断面は角くぎか丸くぎか不明、現在長7.5cm、巾1.6cm。



第12図 特殊遺物実測図

図 版



① 大和久遺跡全景 南から



図版 1

② SBO 1 建物跡 東から



① SBO 1 建物跡 柱穴断面 (P2)



図版2

② SBO 1 建物跡 柱穴断面 (P3)



① SB01建物跡 柱穴断面 (P5)



② SB01建物跡 柱穴断面 (P8)



① SB01・SB02建物跡 東から



図版4

② SB02建物跡 柱穴断面 (P 1)

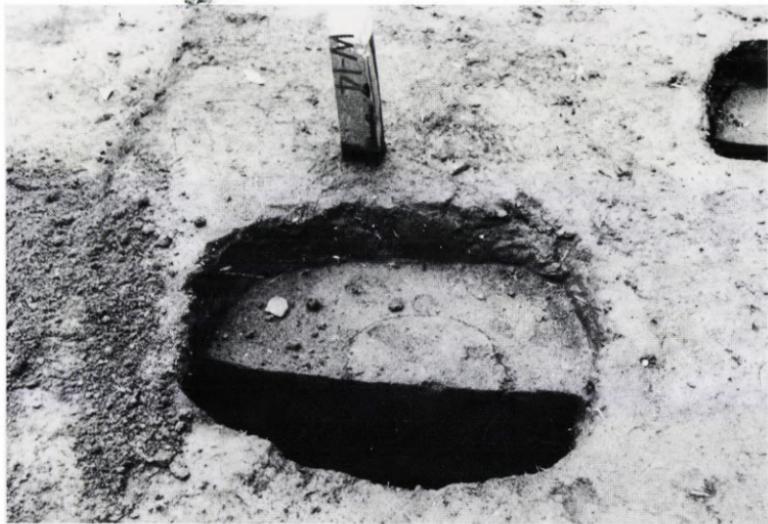
① SB02・SB03建物跡 東から

図版5





① SB02・SB03建物跡 東から



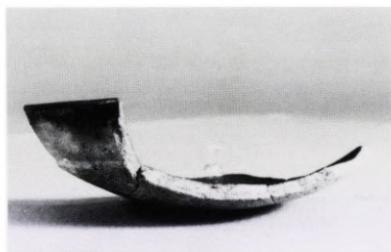
図版6

② SB03建物跡 柱穴断面 (P2)

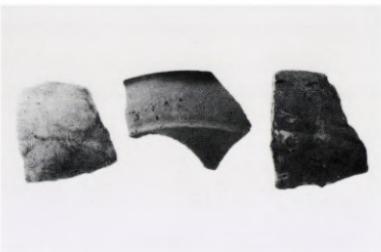


図版 7

① 一号土坑断面 (SKO 1)



①



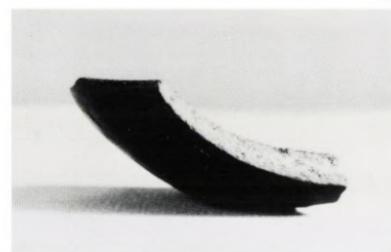
⑤



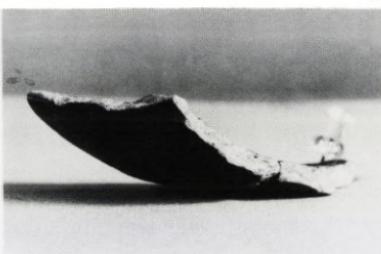
②



⑥



③



⑦



④



⑧

図版8 出土遺物 ①-(第6図-2) ②-(第6図-4) ③-(第6図-6) ④-(第7図-18) ⑤-(第6図-1) ⑥-(第6図-9) ⑦-(第7図-12) ⑧-(第7図-19)



①



⑤



②



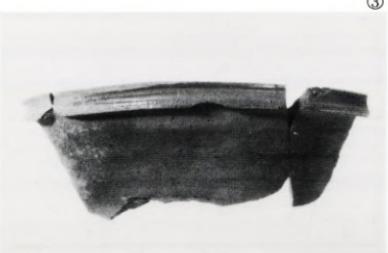
⑥



③



⑦

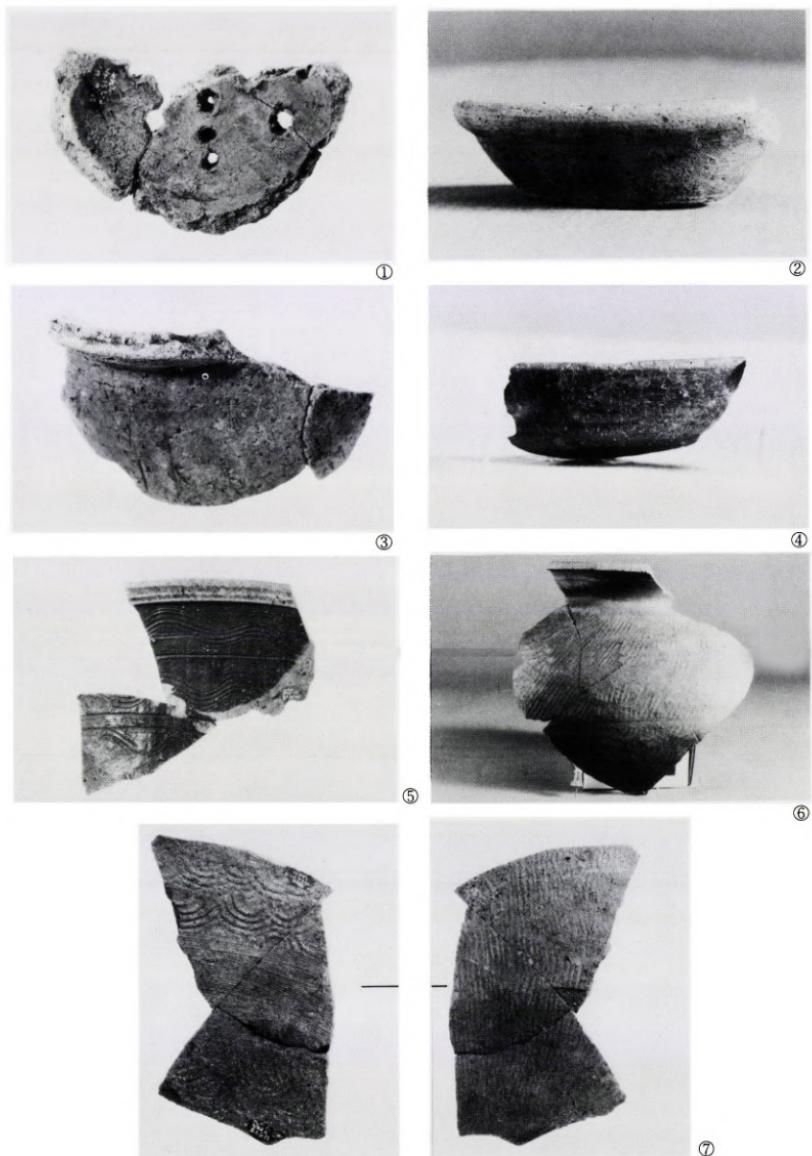


④



⑧

図版9 出土遺物 ①-(第8図-2) ②-(第8図-4) ③-(第8図-5) ④-(第8図-6)
⑤-(第8図-7) ⑥-(第8図-8) ⑦-(第8図-9) ⑧-(第8図-11)



图版10 出土遗物

①—(瓶底部) ②—(第7图-21) ③—(第7图-22)

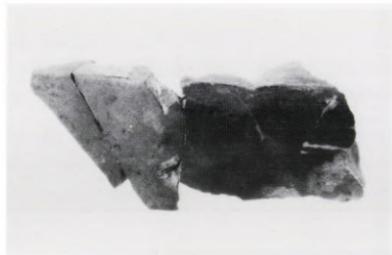
⑤—(第9图-15) ⑥—(第9图-12) ⑦—(第10图-17)



①



②



③



④



⑤



⑥

図版11 出土遺物 ①-(第12図-1) ②-(第12図-3) ③-(第11図-1)
④-(第11図-3) ⑤-(第11図-2) ⑥-(第12図-2)(漆紙付着土師器環)

第2編 大和久館跡

第1章 大和久館遺構

第1節 大和久館の概要

中世には、大和久郷と称し、鎌倉末期から見える郷村名。白河荘のうち。文保2年2月16日の関東下知状によれば「陸奥国白河庄 富沢、直角、大和久……深谷等地頭職事」と見え、白河荘内の当郷以下諸郷村の地頭職が結城盛広領（北結城）として記載されている。同下知状は結城盛広の所領に関する手縫証文が焼失したため、幕府が惣領の結城宗広の申状に任せて領掌するよう命じたものである。（熱海白川文書）建武2年9月24日の陸奥国宣案および同年11月15日の太政官符に「白河郡内攝津入道々榮跡〈除大和久郷〉事」と見え、結城盛広跡のうち大和久を除いて結城宗広へ行賞することが記されている（結城文書）。その後、「白河古事考」によれば多賀谷左衛尉の居住する大和久館が永禄年中（1558～1569）に落城したとされている。

石川・岩瀬2郡の界なれば、須賀川の二階堂氏か、又は石川氏の為に攻落されたものか。
(白河古事考卷5)

第2節 大和久館の立地

根小屋、現在の大和久の集落は旧奥州街道添に発達した、近世の集落である。これは近世の初め、徳川幕府の奥州街道の整備に伴って、中世集落を、街道添に移転させる政策によるもので、中世の集落は現在より西寄りの井戸尻地区の近くに武家集落である根小屋があったと想定される。東北自動車道の建設に伴なう発掘調査で三峯森、堰ノ上、孤石の各遺跡が発見され、大和久館の東南麓に古代の遺跡が確認された。古代の遺跡ではあるが、中世も古代とあまり生活の場所は移動しないと考えられるため、これらの遺跡のある井戸尻地区は大和久館の根小屋集落と深いかかわり合いを持つと考えたい。

第3節

南通路（大手口）と西通路（搦手口）

南通路は南から北に、ほぼ一直線に、尾根添に通じている。現存する道型は約200mである。この南方にも延びていたと考えられる遺構は、東北自動車道の工事によって破壊されているが、井戸尻集落に続いているものと想定される。館跡全体の遺構配置などから考えて、この館の館主等の居館は南地区にあったものであろう。

通路の構造は、両側に巾5mの低い土塁を築き、通路は2mの巾を持っている。坂の勾

配は切り盛を行ない、登りやすい構造になっている。

大手口等の遺構については前述のごとく不明であるが、館の麓に通じている新城方面に通する道路は、中世以来の会津街道と連結を持つ街道として重要な幹線であったと考えられ、根小屋敷から大手口等の施設はこの地区にあったものと考えられる。

本丸へ通ずる西通路（搦手口）は館の西部から通する尾根添えに設けられており、構造も大手口通路と変わらない。この通路は山城の西方約270mにある三角点のある丘に通じておき、本丸と搦手を連絡する作戦道路と考えられるものである。

このほか大和久の館山を東西に横断する道路があるが近世に開かれた新城方面への道路と伝えられているところから、この道路は直接大和久館とは関係の無いものと考えられる。

第4節 山城跡（本丸）

本丸は標高316mにあり、中心線はほぼ南北を示す山城である。遺構として現存するものは、前述の通路跡と3ヶ所の郭跡である。仮りに一の郭、二の郭、三の郭と名づけて説明することとしたい。

1 一の郭

郭の主体部は南北55m、東西25mの長方形の地形である。これを取り囲むように、巾3m、高さ1m程の芝土居と考えられる土壘跡がある。この一の郭の北・西・南の3方には巾7m～8mの空濠が設けられている。空掘は1m～1.5mの深さである。

2 二の郭

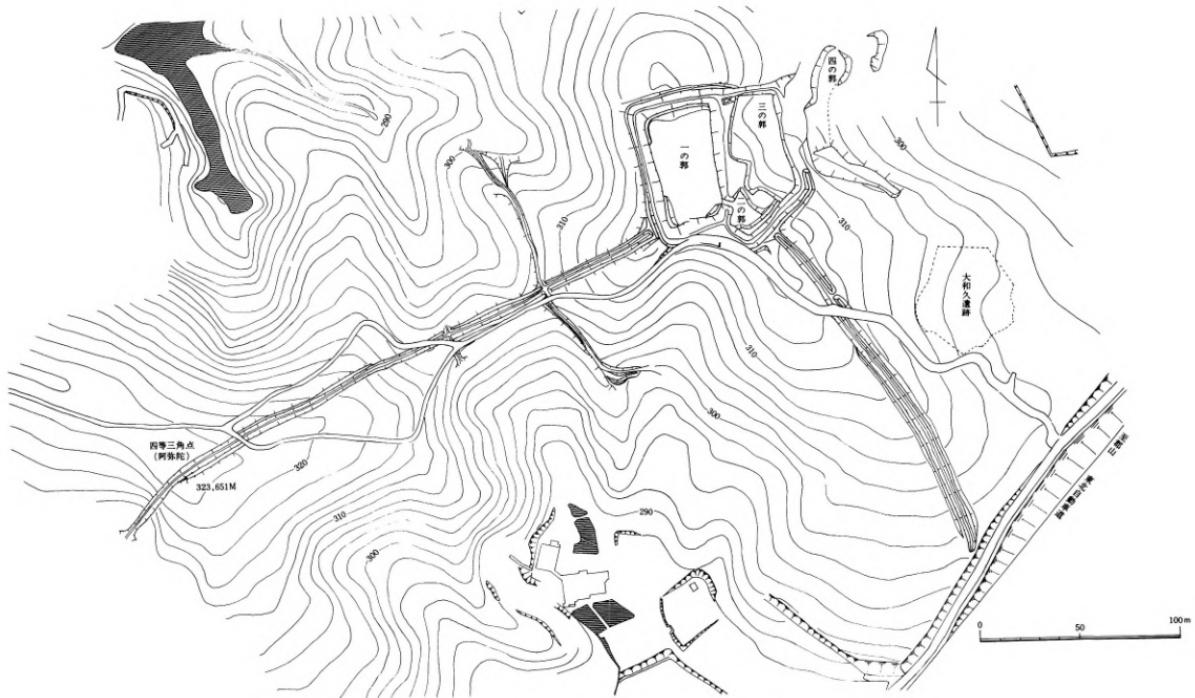
一の郭の東南部に付属する郭である。その役割等は不明であるが、後世馬出しと呼ばれる施設とも考えられる。南北15m、東西15mのほぼ方形の郭で周囲は低い芝土居で囲まれている。大手口通路の取付口で巾6m、深さ2mの空濠があり、橋状の施設によって、大手口通路と連絡していたものと考えられる。

3 三の郭

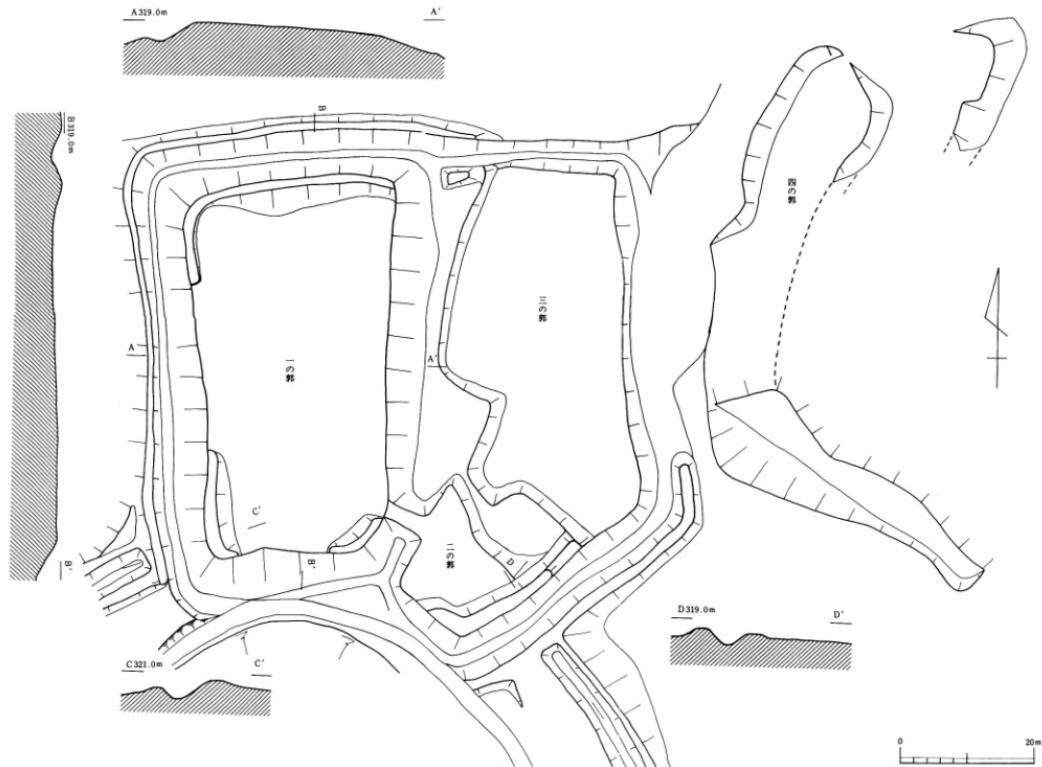
一の郭の東下段に位置しその比高3mである。この平場は南北55m、東西30mの広さである。北側に低い芝土居があり、東側は高さ1m程の切り落しである。三の郭の東部は空濠によって囲はれ、防衛施設の残存が認められる。

4 四の郭（腰郭）

三の郭の東に位置し三の郭から四の郭には、ゆるい切落しがあり人工的な、細長い平場が認められるが、遺構は不明確な点が多く、後世の破壊が進んでいる。



第1図 大和久跡全図



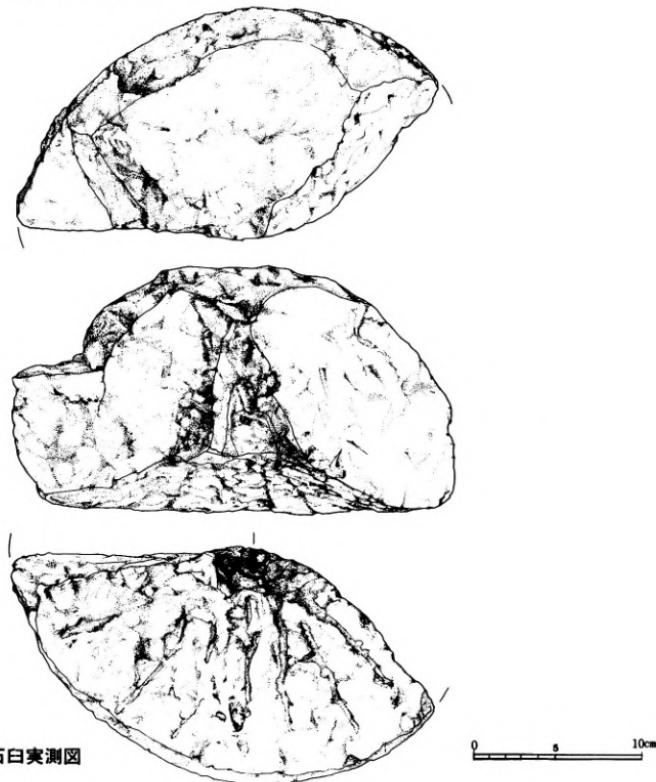
第2図 大和久能跡山城配置図

4 遺物について

山城跡は公園として保存することが決定しているため、発掘調査は行なわなかった。従って遺物は表探によって収集した石臼のみである。

石臼（第3図）

大和久館跡本丸を、昭和57年5月、本丸の地形測量を実施した際に表面採集したものである。手挽き石臼の上臼で、材質は安山岩である。全体として風化が激しく、目立ての溝の形とか幅などは明らかではない。溝の分画数など明らかではないが、放射形と想定できる溝ではないか。石臼の大きさは復元推定直径28cm、高さ推定14.5cmである。本資料は、汎用手挽臼に属するもので、米、麦、雑穀等の粉ひき用に使用され、普通一人でひくが、向い合って二人でひくこともある。



第3図 石臼実測図

ま　と　め

1. 遺物について

古代遺跡の大和久遺跡からは内面黒色処理の土師器が主として検出されたが、縄文土器の破片が数点発見されている。縄文時代の遺構は検出されず、その内容等は不明である。遺物は縄文後期の土器と考えられる。

大和久遺跡は古代の掘立柱建物を主とする。小集落跡で他に見られるような竪穴住居跡を伴わない例の遺跡である。

発見された遺物は土師器・須恵器を主とするが、竪穴住居は検出されず、遺物との共伴関係は明らかでない。

遺物は須恵器・土師器ともすべて破片で完形の資料は一点もない。环については、断片的であるが、技法が明らかなものがあり1~4類までの特徴が認められる。

土師器環（技法からみた分類）

- 1類 底部が丸底で体部の内外面ともに段を残し、内面黒色処理の非ロクロの環である。
1類に属する環は、ていねいなミガキを施しているのが見られる。
- 2類 非ロクロの環で、内外面黒色処理による。底部は平底風丸底を呈し、段を有していないタイプである。内・外面にミガキが認められる。
- 3類 ロクロ調整による、内面黒色処理を施した環で、体部はやや内湾気味に立ち上がる器形を持ち、体部回転ロクロ調整が見られ、底部回転糸切りである。
- 4類 発見された土器は少なく、内面黒色処理を施した環の破片である。底部には回転糸切りによる切離し技法が認められる。

土師器甕

遺跡全面から検出されているが、遺跡が掘立柱建物群であるため、遺構と遺物の共伴関係が明らかでない。成形技法によって二形式に分類できる。

- 1類 出土地点等は不明である。非ロクロ成形のもので、体部ヘラ調整が認められる。
- 2類 外面、口縁部ヨコナデ、胴部ハケメが認められ、内面では口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデである。

手捏土器

この土器も遺構との共伴関係は不明である。粘土紐巻き上げである。

漆紙付着土器

内面黒色処理の内外面に段を有する環の破片である。内面に漆紙が付着している。漆紙については昭和53(1978)年6月、宮城県多賀城跡調査研究所に於て桑原滋郎先生によって

発表され、漆紙文書の所在が明らかにされたものである。

今回検出された漆紙には文字等は不明であった。

須恵器

高台付壺、破片である、底部切離し技法は明らかでない。再調整はロクロによって行なわれている。

壺は底部ヘラ切りを行ない、再調整ロクロにより仕上げられている。

大和久遺跡出土土器について

大和久遺跡の今回検出された遺構は、すべて掘立柱の建物で、堅穴住居は伴っていない。従って検出された土器については、明らかな共伴関係は不明な点が多い。

壺等から考えて奈良時代まで逆ることは明らかであると考えられよう。栗廻式・国分寺下層式・表杉ノ入式等の時期に相当すると考えられる。

中世の遺物

大和久遺跡は中世の大和久館と復合することはすでに説明した通りである。今回の調査で発見された、中世の遺物は点数が少なく、古銭と石臼のみである。古銭は「大聖元寶」で宋銭である。宋銭は鎌倉時代幕府が通貨として宋國から輸入したものとされている。古銭が発見されたのは、大和久遺跡の建物群のある地域からである。

石臼は、大和久館本丸跡から表採されたものである。この石臼は目が放射状に刻まれており、中世まで逆る遺物と考えられる。

遺構について

掘立柱建物跡 3 棟、土坑 2 基、柵列と考えられる柱穴。

掘立柱跡、建物群の時期は出土遺物から上限が推定できるが、下限については明確に示す根拠に乏しい。

総数 3 棟検出されているが、3 棟とも共存した時期は無かったものと考える。

- | | | |
|-------------------|---------|-------------|
| 1) 掘り方の形状・大きさによる。 | S B 0 1 | 1 辻 0.9m 以上 |
| | S B 0 2 | 1 辻 0.5m 以上 |
| | S B 0 3 | 1 辻 0.5m 以上 |
| 2) 主軸方位による分類 | S B 0 1 | N 12° W |
| | S B 0 2 | N 7° W |
| | S B 0 3 | N 3° W |

土坑について

いずれの土坑からも遺物は発見されず、その内容等不明な点が多い。

大和久館跡

古代の記録には明らかにされていない。中世には大和久郷の郷名が、鎌倉末期から記録に見られる。文保2年(1318)結城盛広の手継証文焼失記録に見えるのが、大和久郷が歴史上に現われる初めである。城主等記録は明らかではないが、「白河古事考」に永祿年中(1558~1570)多賀谷左兵衛が居城した大和久館が落城した記録がある。これは、二階堂家(須賀川城主)か、石川氏により攻められたものと考えられている。これによると大和久館は、中世を通じて白河結城氏の北方を守る拠点として重要な役割を果していたものであろう。

大和久館は山城と居館・根小屋は分かれて居たと考えられる。今回の調査によって発見された、本丸に当る山城に通ずる2本の古道のうち、井戸尻地区から北東に通ずる道は、居館、根小屋地区から、山城に通する大手口の通路と考えられる。従って大和久館の館主・家臣団は井戸尻地区に本拠を構えていたものであろう。

参考文献

1926	西白河郡誌	西白河郡役所
1927	白河古事考(地)	堀川古楓堂
1932	白河風土記	堀川古楓堂
1975	東北自動車道報告書	福島県教育委員会
1977	矢吹町史 第2巻	矢吹町役場
1980	矢吹町史 第1巻	矢吹町役場
1980	日本城郭大系 I	新人物往来社
1981	角川日本地名大辞典 福島県	角川書店
1981	東北新幹線関連遺跡発掘調査報告Ⅳ	福島県教育委員会

図 版



① 左. 樹形・右一の郭（北から）



図版 1

② 空堀（南から）



① 一の郭・空堀（西北から）



図版2

② 一の郭・空堀（西南から）



① 二の郭東空堀（北から）



図版3

② 石臼

大和久遺跡・大和久館跡 発掘調査報告

発 行 昭和58年11月31日
編集・発行 福島県矢吹町一本木101番地
矢吹町教育委員会
印 刷 福島県須賀川市聖田50番地
株式会社トキワ印刷所